



巻頭随筆

## ポーランドで想うこと

杉本 安子先生

洗足学園大学助教授  
全日本ピアノ指導者協会本部職務評議員、運営委員、演奏研究委員長  
検定・指導者育成委員

オリンピック観戦漬けだった日本の毎日から脱出して20世紀最後の年に開催されている第14回ショパン国際コンクールを聴きにポーランド、ワルシャワに現在滞在しています。連日朝10時から夜10時頃までのハードスケジュールですが、時間の流れのゆったりさと静かな空間を満喫しています。いつも思うのですが日本にいとアツという間に1日が過ぎてしましますが、こちらは1日が長く感じられます。

5年振りのポーランドは資本主義の影響でずい分変わっていました。コンクールの会場でまず気付くのが、見慣れていたステージの趣きが非常に変わった事です。哀愁を帯びた表情のショパンの銅のレリーフが取りはずされ、シドニーオリンピックさながらの川を思わせる水色のパネルが設置されて、その上に万国旗、もっと驚いたのは水色の光を放つネオンライトのショパンの横顔がそこに浮かび上がっていた事です。

更に演奏中に何度も携帯電話のベルの音が鳴ったのには閉口しました。5年前には外の音も聞こえず、会場内はそこだけまるで別世界で音楽に浸っていられた空間だったのでこれは大きな変化です。時代の流れといえはそれまでですが、大変残念な気がします。ショパンコンクールのあり方も今後更に変化せざるを得ないのでしょうか。

その会場で世界のトップレベルの出場者達の様々なショパンが毎日演奏され、その表現の多様さが新鮮です。今回はアジアパワーが全開、中国系の出場者の数も大変増えました。同じアジアでも音楽の表現の仕方はずい分違いがあります。中国系の人には良い意味でも悪い意味でも自己主張の強い音楽をします。反対に日本人は以前から、個性がない、きちんと弾いているが音楽が平板で音がこちらに届いて来ないと言われていたのですが、その先入観を取り払って下さる様な演奏に何人か出会い、日本人の1人としてとても嬉しく感じました。彼らは既に外国で教育を受けられている方達の様で、音がとても魅力

的で音楽が立体的に聞こえます。私は今回遠くの席で聴いていましたので、「音の響き方の差」というものを非常に実感しました。自分の音を聴くという事は大変難しい事で、「聴く」事と「聞く」とでは意味が変わってきます。実際に辞書で調べてみると、聴くはlistenで聞こうと耳を傾けて努力すること、聞くはhearで、区別してあるのが興味深い事です。又ある人から聞いた所によると、聴くは耳に「14の心」と書くところから14の心をもって音を聞こうと努力する意味だそうです。その事がいかに難しいかが、文字からもくみ取れます。意味をもった自分の音を持った方の演奏は聴衆の心の琴線に触れてきますが、どんなにきちんと弾かれていても印象に残らない演奏もあります。その原因は色々あるでしょうが、こういう所にもあるのかもしれない。

今回有名なアウシュビッツにも行ってきましたが、1軒のバラックの家に1枚の写真が貼ってありました。1941年に撮られた収容所の中でのオーケストラの演奏に聴き入る人々の姿を写したものです。通訳の方の話によると、音楽を聴いて彼らはとても心を慰められていたそうです。悲惨な状況の中で音楽の持つ力がいかに大きかったかが想像出来ます。今後ショパンコンクールも資本主義の影響を受けて変化してってしまうかもしれません。物質が豊富になると音楽は片隅に追いやられがちです。物質的にも精神的にもハングリーな方が、人々は音楽を求め、そして慰められ、力を与えてもらえるのかもしれない。連日の素晴らしい各国の出場者の演奏を聴いていて、私達は至福の時を味わっており、その瞬間日常のわずらわしい事も忘れます。アウシュビッツに収容されていた人達もその様な気持ちだったのではないのでしょうか。21世紀になっても皆に夢を与えてくれるこのコンクールを存続して欲しいと、心から思います。体力と気力があつたら2005年にも又、訪れてみたいと思うショパンコンクールでした。(10月13日ワルシャワにて)

### シリーズ特集

## 21世紀に求められる ピアノレッスン創造【5】

### ～音楽が切り開いた道～

勉強や仕事、現代人は何かと忙しい日々を送っている。その中で、音楽とどのように、どのくらい触れ合っていくか、人はさまざまな局面で選択を迫られる。

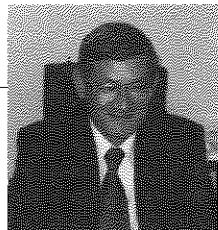
ピアノ指導者も多様な生き方と音楽との関わりを求める生徒への対応は、頭を悩ませていることだろう。

音楽の道は、演奏家や指導者になることだけが最終目標ではなく、音楽知識を生かした仕事、また音楽教育で養われた資質を生かした生き方など、音楽という一つの木からいかようにも枝葉を伸ばして行けるのだ。

この特集では、音楽によって人はどのような道を切り開いているか、事例を紹介しながら、音楽を愛する一人一人の将来の可能性を探りたい。

菅野恵理子

# 初のインターンシップ修了企画 音大座談会～社会との接点を求めて～



事務局長  
松尾 吉雅氏



学生課課長代行  
中林 博司氏



教務課課長  
鹿野 道男氏



器楽(ピアノ)専攻3年  
インターン生  
磯部 夏香さん



音楽教育専攻3年  
インターン生  
山口 陽子さん



器楽(ピアノ)専攻3年  
インターン生  
重見 暁史さん



器楽(ピアノ)専攻3年  
横山 智一さん



器楽(ピアノ)専攻3年  
中尾 和宏さん

特集1

去る7月～9月までの期間、社団法人全日本ピアノ指導者協会と東京音楽大学でインターンシップ(就職実習)を行いました。受入をした3名の学生を含む計5名の学生と大学側の教員陣とで、インターン最終日に座談会を実施。今後の音大のあり方についてディスカッションが交わされました。

司会&文◎霜島美和

## 東京音大の初のインターンシップを ピティナで実施

— 本日は、インターンシップの体験を通じて感じたことをまじえながら、音大生の就職に関するテーマでお話いただきたいとします。まずは、10日間のインターンシップ、お疲れ様でした。現在のご感想は？

磯部：大学3年になりそろそろ将来の進路について考え始めていた頃、偶然構内の掲示板でインターン生募集の案内を見て、「これだ!」と思って飛びついてしまいました。教育実習があるように、就職実習もやってみたいと思っていましたので。実際に「コンクール業務」のサポートを体験してみて、想像以上で大変でしたが、期待以上に得るものがあったと実感しています。インターンはアルバイトとは違い、決められた仕事をこなすだけでなく、さらに「よりよくするにはどうしたらよいか」を考えた10日間でした。

山口：私は、「イベント実務」として、全国決勝大会表彰式の準備と当日の運営を一部担当させていただきました。社会の中でのピティナについて知ることができた

ったと同時に、社会的な視点で仕事の1つ1つを見るようになってきたと思います。また事務局スタッフの皆さんはそれぞれが独立して仕事をし、少人数で大組織を運営している姿をみて驚きました。スタッフの方には、進路への不安の話をきいていただきアドバイスをしていただきまして、現在は社会に出る前にやらなければならない事が山積み、という感じです。

重見：実は本日の座談会の企画・準備は研修の一環であり、私のインターンシップの集大成でもあります。私は、「会報編集業務」ということで、主に東京音大の学生を例に、音大生の就職観の調査や取材をしてきました。アンケート1つ作るにも、企画趣旨との照合や表現方法、また、アンケートに応じてくれる学生の確保等、苦労が多々ありました。いつも与えられたルールの上を歩んできましたので、今回のインターンシップの体験を通して、「生みの苦しみ」や社会の厳しい一面を垣間見たような気がします。

鹿野：以前から文部省よりインターンシップの推奨が唱えられており、学生に就職体験をさせるのは大変意義

あることであると確信していました。今回はピティナからのお声掛けとご協力のもと、本校としては初めてインターンの導入に動きました。毎回のインターン実施報告書を見せていただきましたが、学生も彼なりに非常によくやってくれたと思います。

中林：初のインターン募集ということで一体何人の学生が応募してくるだろうかと不安でしたが、蓋を空けて見たら50人以上の参加希望者が集まりました。何十倍もの面接を潜り抜けてこられたみなさんのインターン中の活躍を、全国決勝大会表彰式で拝見しました。今思えば、ピティナの事務局で奮闘している姿も見学したかったですね。

## 進路への不安と迷い

— 次回はぜひ事務局にいらして、学生さんの仕事ぶりをご覧になって下さい。ところで、今回東京音大生90名に実施した進路に関するアンケートはいかがでしたか？

重見：演奏家と一般企業への就職など、相対する選択肢を複数選ぶ学生が想像以上に存在し、学生の進路に対する迷いが浮き彫りとなりました。

松尾：演奏家、教員以外への興味も予想以上に多い結果は、先日の学内の進路調査でも同様ですね。実のところ、そもそも学生は演奏家としての道か、あるいは教職、指導者などの道以外には、さほど関心がないものと思っていました。一般企業へ就職する学生は毎年若干名いますが、どちらかというと特異な例だと感じていました。しかし、今回実際インターンを希望した学生の話を見ると、必ずしもそうではないらしい。少なくとも、どこかに就職するというよりは、親から自立できればよい、という考えの学生もいるようですね。学校側としては、こうした要望に応えていくべきであると考えているところです。

鹿野：一般に音大は音楽の教員や演奏家の養成学校とされており、入学時の調査を見ても、1つに進路を絞っている学生は少ないのが実情です。確かに最近父兄からの問い合わせといえば、進路に関する真剣な相談ばかり。卒業後「自立」できるような大学側のサポートを期待しているのを、最近ひしひしと感じています。中林：学生課では、これまで就職セミナーを実施してきましたが、今まであまり参加者はいなかったのですが、これも時代の変化でしょうか。学生の意識の変化に対する勉強が不足していたことは否めないですね。次の後輩たちのために、今後勉強していきたいですね。

## 教員採用や演奏家への道

— 確かに、バブル崩壊、少子化・高齢化の波が、学生の意識に影響しているものと思われます。実際、教員採用の道は、大変な難関になっていると伺っていますが。

鹿野：東京音大生の今年度教員採用試験の結果は、全41名受けたうち、1次通過16名でした。募集採用人員が著しく減少し、一頃に比べると格段に合格が難しくなっている今日において、この結果は上出来といえるで

しょう。これは東京音大がかつてより以上に学力共にレベルアップしていることを物語っています。今後は、教員志望の学生も、学生のうちに視野の広さや物事の処置能力を身につけて欲しいですね。

中尾：私は教員志望ということで、現在中学生に全科目の家庭教師をやっていますが、これも就職体験として学ぶところはたくさんあります。

松尾：例えば学内であれば、図書館受付や事務局の補助、学生課のカウンター業務など、一度トータルな仕事をさせるのもよいのではないかな。学生と学校関係者サイド、学校内外では、180度意識が異なる場合もあるのが現実であり、教員側の立場にいる人の認識や気持ちを理解する糸口になるでしょう。

横山：教員志望者のインターンの場合と同様、演奏家志望の学生にとっても、逆の立場を経験するのは大変重要なことだと思っています。コンサートを企画したり集客する仕事には、やはり聴衆側の立場を熟知している必要がありますから、このような企業インターンには、就職希望者に限らず興味を示す学生も多いのではないのでしょうか。私自身、演奏家志望ですが、できる範囲でも、例えば、演奏会に行き聴く立場で音楽を勉強しているつもりですし、自分が出る演奏会やコンクールでも、自分の音楽を他人のどう感じるのか研究するように努めています。

磯部：今までコンクールといえば自分は受ける側でしたが、舞台裏に携わることで、コンクールが実に様々な作業の積み重ねと人との関わりで動いていることを実際に見るのができ、大きな収穫となりました。演奏を勉強する人にとって、運営する立場に立つと視野が広がるのではないかと思います。

## 職業体験とアルバイト

— 先ほどアルバイトの話が出ましたが、職業体験としてアルバイトは意識して活用されていますか？

山口：大学で講義を聴くだけでなく、毎日ピアノの練習をし、定期的に個人レッスンを受ける、という、半ば追われるように生活しています。そんな生活の中で、アルバイトにたくさんの時間を割くことは、なかなか難しいですね。

磯部：実際、音楽系企業でアルバイトしたいと思って、9:00～17:00までの時間帯で、学生には難しい条件のところが多いように思います。コンサートホールでチケットもぎりなどのアルバイトをしたことがありますが、企業就職に活かせる体験とまでは言えませんでした。アルバイトを通して色々体験するのはいいと思うものの、やはりアルバイトに追われてやりたい勉強がおろそかになるのは自分としては本意ではないし、学生という身分でないとできないことを体験したいというジレンマを抱えている学生も多いのではないのでしょうか。

特集1



## 進路相談の相手がいない

—では、ますます多様になる音大生の進路希望をサポートするために、音大では今後どういう面を強化していくとよいでしょうか？

重見：今回のアンケートでも見受けられた意見ですが、演奏科の学生は、演奏家や指導者以外の進路について相談する先生がいないということです。実際、今回のインターンを進めてくれたのは実技の先生ですが、「私は社会人でもピアノだけ専門にやってきたから、あなたより一般社会のことはわかっていないかもしれない」とおっしゃっていました。演奏科の先生は演奏者として教育者としてプロですが、一般社会での経験も情報も少ない為、生徒の進路相談に応じられないというのも事実かと思っています。

磯部：さらに、実技を最も学んでほしいと願って一生懸命指導して下さっている先生に、演奏以外の話をピアノの先生に切り出すのは、なかなか難しい面がありますよね。実技をおろそかにしているような印象を与えかねないですから・・・。

松尾：実は今回のインターン導入にあたって、演奏科の教授陣からは消極的な意見もあったのですが、こういった学生側の心の内を実感として知らない先生方も多いのかもしれない。

鹿野：管楽器などはそもそも演奏家、指導者としての進路が狭いので、指導者の進路への心配は強いようです。ピアノは特に、習い事としてのシェアが圧倒的に高いこともあって、進路に対する不安感是比较的少ないのかもわからないですね。

磯部：私は演奏家、指導者以外の進路を考える上でも、専門分野をより深く学ぶ上でも、一般大学のようなゼミがあるとよいなと思っていたのですが、実技以外は、一対多数の授業のため、双方向のコミュニケーションが取れません。他分野の指導者とのつながりを作っていくためにも、授業を小人数化にして、密に学べる環境を創出していただけたらと思います。

## 多彩な選択肢・評価基準へ

—一対一で指導を受ける演奏実技の先生と学生の密な関係が、より演奏分野に対する学生の意見や活動が反映させやすくなっているのかもしれない。

山口：音楽大学は音楽を学ぶことについては最高の場です（全員同意）。素晴らしい先生方や演奏の機会にも恵まれ、学生も非常に満足していると思います。でも一方では、少々受身な発想ですが、自分の力ではできないところ、自分の視野では気付かないところを大学でフォローしていただきたいという気持ちもあります。入学してからの勉強や体験の機会、選択肢は多い方がいいです。

磯部：先生方も多くの学生のそれぞれに対応するのは大変なので、学生を各目的の統一された小人数にグループ化するのによいと思います。音大生1人1人を評価

でき、多様な価値基準を大学に持っていただくことができるのではないかと思います。例えば、演奏実技が素晴らしいければ優秀な学生というだけでなく、ボランティア活動の実績、音楽史や楽理など多方面で活躍する学生たちなど、その人を評価する方法はもっとたくさんあるはず。演奏を学ぶにしても、これまでの経験が財産で、どんなチャレンジも応援してくれる学校であってほしいです。

## 一般教養のレベルアップへ

—企業側も、学歴という評価基準だけでなく、多様な価値観で社員募集をする例も多くなりましたね。面接官は、学生時代、どんな思いでどんな体験してきたのか、そこから入社後のシュミレーションをしています。そんな中で、ピティナのような音楽産業には、一般大学で音楽以外の専門（例えば商学や語学など）を勉強してきた学生が、音楽に対する熱い思いとユニークな音楽体験をもって入局試験に臨まれる例は増えてきています。逆に、音大の学生には「音楽以外の何か」を期待してしまうものかもしれません。

鹿野：一般大学を卒業している同胞でも、ピアノ演奏が上手な人がいるが、現在の一般大学生の音楽実技の実力には驚きますね。「音大生は一般教養が足りない」というイメージがあるのは否めないし、学生にもっと本も読んでいただきたいと思っています。

中尾：実技だけきちんとやって、一般教養は適当にやればよい、というのがそもそも学校側の体制としてあるように感じます。東京音大の一般教養の授業は、一般の大学に比べ、非常に低いと思います。国立音楽大学が一般教養の授業を、一橋大学と連携を組み始めたのですが、これは音大生にとって大変良いことだと思います。

重見：確かに、学科名と授業内容にギャップがかなりあって、履修してもこのテーマを学んだとはとても言いにくいのが現実としてあります。

横山：例えば数学などは、音楽そのものとは一見関係ないように思えますが、思考能力を高めるなど、目にみえない効果があると思います。音楽を解釈するにも演奏技法を身に付けるにしても、多角的に考える能力が必要です。音大から音楽関連カリキュラムに偏りがあるのは当然で、「一般教養課程が少ない＝常識が不足している」と見るのはいかがなものかと思っています。演奏家を志望しているからこそ、他人の発想の源泉が何なのか、常に考えています。一般教養の講義を聴くときでも、雑談から本題に入るまでの導入の仕方に、その先生の発想力が垣間見えるものです。

松尾：まさかそのようなことを考えて一般教養を勉強しているとは、脱帽ですね。

## 実務的なスキル取得の環境整備

—一般教養や実技以外の授業で、就職に活かせるような授業というのはありますか？

鹿野：本学には、就職向けの実務的なカリキュラムは現

在ありません。インターンシップは、行動力や実戦力など、実社会で必要となる能力を磨く良い機会だと思い、導入するよう働きかけたわけですが、導入にあたって懸念していたことは、実務的なことはやっていないのに、企業に行っ何が出来ののだろうか、ということでした。「働かせたら出来るだろう」という確信がありませんでした。

山口：インターン参加を機に、私たち3人ともパソコンを購入しました。何となく「そろそろパソコンを買わなくては」と思っていたところ、ピティナではスタッフ全員がパソコンを自由に使っている姿に刺激を受けました。授業でちょっと扱ったくらいでは役に立たず、終始パソコンには苦戦しましたね。スタッフの方に何度も使い方を質問して迷惑をかけてしまいましたが、根気良く親切に教えてくれました。アルバイトをするにしても、コンピュータのスキルが条件になっている企業が多い時代です。一般の大学のように、パソコンを各学生に普及させ、メール活用の設備を整えていただくのは難しいかもしれませんが、授業の中でコンピュータを使う場があると意識が高まると思います。社会で最低限求められているものを、学生のうちに体験できる機会が必要だと思います。

磯部：私はインターンに参加する以前から、企業への興味はもともとあり、大学で音楽産業の講義を受けたことがあります。就職セミナーなども同様かと思うのですが、体験談を通じて「こんな職業があるんだ」という知識は得られるものの、漠然とそれだけで終わってしまい、自分の行動ベースでの変化はありませんでした。もちろん、こちらの積極性にもよるのだと思いますが、インターンシップのように、現場に浸り新しい世界を見れば、嫌がおうにも自分の現状を知ることができます。

## 音楽大学の社会との接点の拡大へ

—今後インターンシップに代表される社会体験を、大学側ではどのような展開されようとお考えですか？

鹿野：大学側は、一般社会との関わりがまだ薄く、情報が不足しています。来年には某交響楽団とのインターンシップが決定しておりますが、徐々に定着させ実績を上げながら、できれば1～2年後単位化する方向で検討していきたいと考えています。

松尾：インターンシップなどの協力関係を築きながら、音楽を軸とする社会との接点を増やし、社会の中にある音楽大学を目指していきたいと思っています。

中林：学生と大学側の意見交換の場が少なく、双方の意識のずれは今後できるだけ避けていきたいですね。かつて学生の意見は学生自身による自治会で話し合われ

た上学生課に意見していた歴史もありますが、今は選挙すら行われていません。学校に対して要望を伝える手段があることを後輩達に教えていきたいと思っています。

—初めてのインターンでしたが、ピティナのスタッフにとっても有意義だったようです。音楽業界で働くものにとって、いろいろな音大生から現状を伺うことが出来るのは貴重です。大学と企業が相互に情報を得、メリットを感じるようなインターンを今後も展開していきたいと思っています。では最後に、このインターン生の皆様からひとことお願いします。

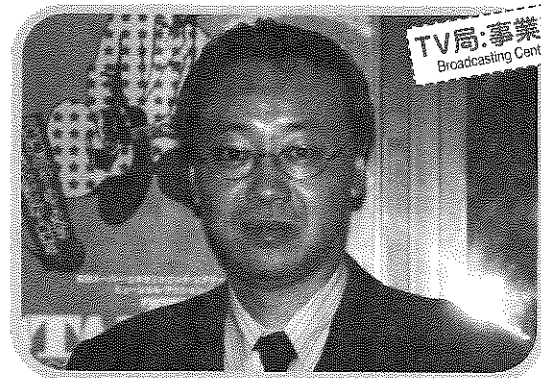
山口：学生は各々「もっとがんばりたい」と思いながらも、毎日を追われるように過ごし、大学生活の中だけにはまってしまうがちです。社会を見る機会や社会との接点を持つという意識が断絶されていた私に、インターンの募集は、視野を広げさせてくれるものであったと思います。音楽を勉強した人の将来が貧しいものにならないことを願います。

磯部：高校一年生から大学を目指して勉強するように、大学でも先を見越せば準備ができます。インターンの今回の体験は、社会人になるために自分に何が必要かということと同時に大学で何を勉強する必要があるのか考える機会になりました。大学からも積極的に社会に働きかけ、学生に社会へのつなぎ方を示して欲しいと思います。

重見：今日は5人の学生の5通りの意見をきいてくださり、ありがとうございました。学校ではお目にかかるのも難しい先生方に、自分たちの心の内をきいてもらえ、また学校側のお話を伺うことが出来、正直、音大に入ってこういう体験ができるとは思ってもみませんでした。今後はますます、企業、大学、学生三つ巴の連携プレーが必要になってくると思いますが、これが実現したインターンシップと本日の座談会は、これからの音大そして音大生が、次の時代に向けて変わっていく何%かの可能性を感じたひとときでした。本当にありがとうございました。

(2000年9月29日(金) 東京音楽大学にて)

# 音楽業界職業別インタビュー【1】 音楽のすばらしさを広く伝えるマスコミ系



TV局:事業部  
Broadcasting Center

Interview

佐藤 佳則氏

Yoshinori Sato \* テレビ朝日事業局事業部副部長

## 「題名のない音楽会」では奏者と一緒に呼吸する感覚を

企業には人事異動がある。しかし自分の知識や体験はどこにいても発揮できる、佐藤さんはまさにそれを体現している。

芸大楽理科を卒業してテレビ朝日に入社。「もともとはその音楽知識を生かして、BGMや音響効果も印象に残るようなドキュメンタリー番組の制作を志望していた」と語るが、これまで事業、制作、広報と実に多くの部署を担当することになる。

制作時代に関わった公開録画番組「題名のない音楽会」(当時司会は黛敏郎氏)では、ディレクターを担当。「限りある予算の枠内で、番組を膨らませながら、いかにスムーズに進行させるか、また出演者の表情を伝えることにも細心の注意を払っていました。例えば音楽番組ではカメラ割り(配置・アングル・クローズアップタイミングなどの指示)を効果的に行う為に、楽譜が読めて奏者の感情の高ぶ

りがわかるに越したことはないでしょうね。」表情が出やすい場面や息遣いが手に取るように分かる、そうした経験と知識が裏打ちされた映像は、ブラウン管を通して視聴者に伝わる。出演者自身も「奏者と一緒に呼吸している感覚」になる瞬間である。

## 番組と運動できる企画を

制作、広報を経て、今は再び事業部に所属している。今の目標の一つは「テレビの番組と運動できる企画を立案すること。本業以外で収益を上げていく使命感もあります。今、出光音楽賞の担当を任されていますが、受賞者がさらに大きくはばたくために、活躍の場を提供できたらいいですね。」こうした有能な若手をサポートすることに大きな意義を感じている。

## 様々な時代・ジャンル・国の楽器・音楽形態に興味

テレビ局には多種多様な情報が各国から集まるが「やはり情報収集は習慣的に早くなりましたね。また音楽の嗜好も大変幅広くなりました。」

もともと普通高校に通っていた頃、合唱部の伴奏を担当して発声に興味を持ち、芸大に入学後音楽も学んだという音楽歴を持つ佐藤さんであるが、学生時代はオペラ等の他、色々なジャンルの音楽に興味があったそうだ。入社後は「踊り、芝居、歌舞伎や邦楽にも面白さを見いだしました。また以前、民族音楽の先生から「芸術音楽は西洋音楽しかないと思われがちだが、民族音楽にも芸術音楽がある。何でも西洋の平均律の耳で聴いてはいけません」と諭されたことがあります。国やジャンルを超えて音楽を聴くことで、相対的な価値基準が身に付くことを学びました。」

そんな佐藤氏は現在ミュージカルにも強い関心がある。事業局ではそんな夢ある事業のバックアップが、日々行われているのである。(10月4日/テレビ朝日局内にてインタビュー)



TV局:制作  
Broadcasting Center

Interview

稲樹 まりさん

Mari Inamasu \* 日本放送協会番組制作局・音楽番組部ディレクター

## ピアノへの没頭と意外な進路選択

「世界の音楽を伝えたい!」稲樹さんの熱い思いは、南アフリカから始まった。

3歳からピアノを始め、小6から中3まで杉本安子先生に師事。ピティナ・ピアノコンペティションでも優秀な成績を取っていた。そして中学3年生の時父親の転勤で、南アフリカへ。

突然始まった英語漬けの生活で、語学面でのハンデはどうしても隠せなかった。「それだったらピアノで自己主張しよう!」それからより一層ピアノに励むようになる。

南アフリカではピアノ教育を受けられる層が日本より少なく、次第に「ピアノが上手な子」ということで、注目を浴びるようになった。コンペやフェスティバル等に出演したり、SABCという南アフリカ国営放送局の「Young South Africa」というラジオ番組出演のため、スタジオ収録などの経験も。もともと「舞台上弾いている瞬間が好き」で続けてきたピアノだったので、まさに水を得た魚、である。

そんなさなか、同時に世界音楽にも興味を持つようになったそうである。寮では10人一部屋で、様々な人種の人と同居生活をしていた。そこで聞いた「彼らの発する黒人特有のリズム感はそれまでにないもので、強烈に魅せられましたね。人が集まると音楽が自然に湧き起こってくるんです。この感覚は初めて出会うものでした。」稲樹さんはこの体験をこう振り返る。「黒人のリズム感への興味は、クラシック一辺倒の風潮への反抗心だったかもしれないですね。」

帰国後は東大法学部に入学、さらにピアノの会とワンダーフォーゲル部にも所属した。専攻の法律はというと、「ルールを学ぶことに嫌気がさしたというのが本音で、よりクリエイティブなことをしたいと強く思うようになった」そうである。卒業後、司法や官庁の世界に進む同級が多い中、NHKに入社。「自分の主軸はやはり音楽」と大学時代に再認識した結果である。

## 伝えたい音楽の世界、世界の音楽

入社後、自主企画として打ち立てたのが「地球は歌う」のシリーズ。これは毎回5分間で世界の音楽を伝えるという、いわば他局「世界の車窓から」の歌版である。この制作の為、南米4カ国10ヶ所を巡る約2ヶ月のロケを敢行。そこでは、「アマゾン・シャーマン(呪術師)の祈りに震え、チチカカ湖近くの住民が奏でる先祖伝来の口承音楽、太鼓と笛の究極の即興アンサンブルに酔いしれました。そこで感じた思いを5分に凝縮して編集し、視聴者に伝えるのは至難の技でしたが、音楽を切り口に土地を紹介することで社会が見えてくるという面白さがありますね。」これは稲樹さんの生涯テーマになりつつあるようだ。以後、この「地球は歌う」はシリーズとなり、地中海、アジアと、カメラは渡り歩いている。

98年長野五輪の時には、小澤征爾指揮のもと、世界5大陸から衛星生中継で一つの音楽を歌いつないでいく、という企画があった。「ドイツ・ブランデンブルグ門付近からの中継が入り、その後に飛び込んできた南アフリカからの映像は、海岸で黒人が集団で歌っている光景だったのです。文化社会の違いを知る糸口としての音楽の面白さを、また改めて実感した瞬間でした。」

## 拡大する仕事と興味の対象 ～クラシックから民謡の世界まで～

現在は民謡番組制作で「どんとこい民謡」、ラジオ「日本の民謡」などの番組を担当。定型の番組構成の中でいかに趣向をこらすか、効率よくモノや人を動かすか、ステージを魅力的に演出・撮影させるかに力を注いでいる。始めは全く興味がなかった民謡だが、覗いてみると意外と面白く、また世界音楽の一つとしても興味深い研究素材であるらしい。

稲樹さんは一つ気付いたことがある。クラシックとは違い、民謡では歌手と聴衆が同じ視点に立っていること、のだそうだ。改めてクラシックに戻ると、敷居の高さは否めない。もう少し聴衆に近づいても良いのではないか、と考えている。

ところで最後にNHKに入社した理由をお伺いしてみた。「好奇心が強い、の一言につきるかもしれません。」とのお回答。冒頭の「世界の音楽を伝えたい」という欲求が実現できたのも、好奇心と実行力の賜だろう。(9月21日/NHK局内にてインタビュー)





新聞社:企画  
Newspaper Company

Interview

安部 美香子さん

Mikako Abe \* 朝日新聞社文化企画局文化企画部

これまでの学歴変遷と入社まで

「何でも音楽につなげる自分に気がきました。」これが様々な学歴変遷を経て、現在新聞社に勤務している安部さんの言葉である。

安部さんは幼少からピアノを習っており、コンクールの出場歴もある。高校2年生の時に先生の薦めで東京芸術大学楽理科の存在を知り、音楽を言葉で学ぶ面白さに惹かれて入学。卒業後は、「もう音楽は十分学んだという意識と、もともと文学好きが手伝って」横浜市立大国際文化研究科(仏文学専攻)に1年間通うことになる。しかし音楽への関心は意識して断てるものではない。そこで改めて、「自分の中に深く音楽が浸透していたことを再認識したのです。」

再度方向転換をし、東京大学の総合文化の修士課程に入学。ここでは映画、音楽など芸術文化の社会的意義を読み解く表象文化論を学んだ。「修士終了後は、社会に出たいという希望が強くなって、迷わず就職を選びました。演奏会企画等に携わる音楽事務所を探している中で、朝日新聞社の文化企画部が目についたのでしたのです。」ここでは全社一括ではなく、文化企画という分野に特化した人事採用が

なされる。「ここなら自分が生かせるだろう」

それからは新聞社という難関をクリアすべく、「毎日新聞」を読み、特に朝日キーワード集に目を通すなど、時事問題の予習に時間を割きました。またエントリーシートには自己アピールできるエピソードを書いて面接の時に印象づけるようにしました。」そして99年10月に晴れて入社した。

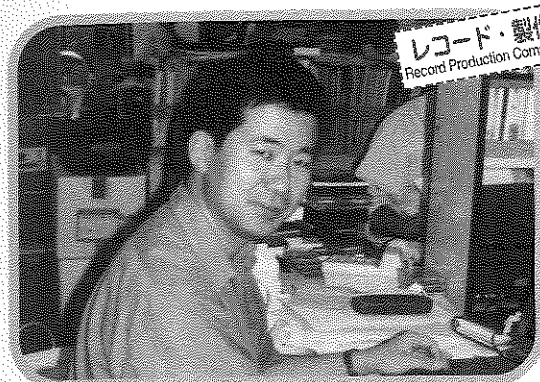
入社後に学んだ社会人としての厳しさ

「音楽を愛するだけでは成り立たない。」これが入社後に学んだ教訓である。2001年春に実現させる予定で進んでいた、あるドイツのアンサンブル楽団の招聘企画が、この秋見送りになってしまったのだ。「この楽団の演奏に惚れ込み、ぜひとも招聘したいと意気込んでいました。そして今年8月彼らが来日した際には、丹念にマネージャーや団員と打合せもしました。音楽専門の自分としては、プログラムや音楽的内容に関しては、抜かりはなかったんです。」しかし内容の詰めに専念する余り、予算組みが甘かったのに後から気付いたのだ。「結局企画は見送りとなってしまいましたが、音楽を愛するだけではビジネスは成立しない、ということをも身を持って知り、良い教訓になりました。」

音楽家は社会も知るべき

安部さん自身、音楽だけを勉強してきたわけでないが、やはり社会に出て知ったことも多かったそう。「音楽しか知らず求めずの世界では、行き詰まった時の選択肢がなく、道を踏み外すことも極度に恐れてしまいますよね。練習以外に時間を割くのがもったいないという気持ちもわかりますが、社会に目を向ける方が自分も気が楽だと思います。」

現在文化企画部の音楽スタッフは4名で、プロジェクトごとにチームを組んで仕事をこなしている。良い演奏、良い企画を求めて、退社後コンサートに出かけることもしばしば。朝日新聞紙面では、月2回『トライアングル』のコーナーに、文化企画部からの情報案内が寄せられるが、まさに日々の仕事の集大成がここに活字となって表れる。新聞社という公共性の高い団体の中で、文化的役割を担っている意気込みが、文字から伝わってくるようである。(9月21日/朝日新聞社内にてインタビュー)



レコード・製作  
Record Production Company

Interview

小川 哲朗氏

Tetsuro Ogawa \* 東芝EMI株式会社 制作ディレクター

レコード・CDコレクターが昂じてレコード制作会社へ

桐朋学園大学を経て、ケルン音楽大学、モスクワ音楽院に留学、パーヴェル・ギリロフ、ヴォスクレンスキー等に師事、ピアノの研鑽を積んだという小川さん。なぜレコード制作会社へ、と興味を持たれる方も多いだろう。「実は学生時代からレコードやCDが好きで、ピアノに限らず他楽器、シンフォニーなどあらゆるクラシック音楽をコレクションしていたんですよ。」

小川さんの音源所有数とそれを聞いた回数は数え切れない。そして今これが無形の財産として企画の役に立っていることは、周知の事実である。「ピアノを極めたこと、そしてあらゆる音楽を聞きまくったこと」は、クラシック音楽の善し悪しの判断に狂いがなかったことを物語っている。

こうして自然な流れで現在の職業までたどり着いたが、学生時代と就職後は意識の変化があったそう。「学生の時はピアノ一筋で個を高めていく作業に没頭し、一人の世界を築くのに関心していましたが、入社後は組織内で仕事をするという、全く学生時代とは違う能力やスキルを求めら

れました。」企画を組むにも100%自分の希望が反映できるわけではなく、会社の方針に従わざるを得ないこともある。「しかし大組織だからこそ可能なこともありますよ。」ちょうどこの日、企画していたアルゲリッチと伊藤京子〜友情のピアノ・デュオのCDが完成したとのこと。次は別府アルゲリッチ音楽祭のレコーディングなどの企画も控えている。

企画に必要な資質

では企画の仕事に最も必要な資質は? 「何が求められているか」を正確に、素早く察知する。音楽が好き。また海外アーティストとの折衝もあるため、語学も必須ですね。」

そんな小川さんが今試みていることがある。「縮小気味のクラシックマーケットを活性化させるべく、コア層周辺のグレーゾーンを、クラシック愛好家として定着させたい。昨年発売されたCD『クラシカルエバー』は、誰もが聴いたことがあるようなクラシック作品を、聴きやすい長さにとめた40曲を収録したもので、まさにこのグレーゾーンをターゲットにしているのです。さらにこのCDを元に音楽を生体験して頂く機会として、『クラシカルエバーコンサート』も企画しました。これはピアノだけでなく、トリオ、アンサンブル、声楽、オーケストラ、あらゆるものを盛り込んだものです。」これは今年7月オーチャードホールにて開催され、大変な好評で来年も開催予定だそうだ。この企画で、クラシックの裾野は確実に拡大しただろう。

社会を敏感に察知する感性

最後に小川さんに、今後の21世紀のクラシック展望を伺った。「今クラシック界は他ジャンルとのクロスオーバーが増え、純粋なクラシックを追求する一方で、より視野の広い、ストーリー性あるアーティストが求められています。またコンサートプログラムも過去遺産の再現、例えばモーツァルトやベートーヴェン等だけでなく、オリジナリティあるプログラム編成能力も必要になるでしょう。」

常に大衆を意識しながら、何が流行っているかを見極め、それを自分のフィールド内でいかに生かすかを考えられる人。「そんなアーティストを発掘したい」そうである。

(9月27日/東芝EMI社内にてインタビュー)



音楽評論家  
Music Critic

Interview

雨宮 さくらさん

Sakura Amamiya \* 評論家 (本名田中麗子:当協会正会員)

数々の音楽雑誌で評論を執筆されている雨宮さくらさん。その筆致は、常に鋭い洞察と愛情に溢れている。

まず評論家とはどのような能力が必要なのか伺ってみた。「第1に音楽を聴くことが好きなこと。」そして「楽譜が読めて、何か楽器が弾ける、自分の審美眼(耳)に自信がある、研究好きで、良心的で責任感がある、そして人間に興味があって、好奇心旺盛、柔軟な思考ができること」。

多言語習得、多読、図書館多利用の学生時代

その境地に達するまでに、どのような研鑽をされたのだろうか。「学生時代は、良い音楽をたくさん聴いて、耳を肥やしました。また多言語の習得に努め、本も多読しましたね。図書館もよく利用していました。更に某新聞社の講座を受講したり、ミニコミ紙の発行に携わったり…。昔から、モノ書き、記者、編集といった仕事に憧れていましたから。」

もちろん音楽以外にもその勉強の幅を広げている。「音楽

だけ勉強すれば良いということでは決してないです。幅広い知識習得に努めることは、必須ですね。芸術一般への興味を持ち、美学や哲学、宗教への研究もしています。」多角的に音楽を聴くためには、それに関わる全てのものを学び肥やにする、という貪欲さが必要なのである。

評論家として仕事を得るには

そして勉強したものを仕事につなげる為に、外に発信していく積極性も欠かせない。「一番初めに書いたのは、シンセサイザーの連載講座で、仕事が欲しくて出版社へ売り込みました。シンセに関しては素人、講座費用を出版社に出して頂き勉強しながらの執筆。これは24才の頃で、コンサート活動もせせとやっていた。しかし連載執筆を通し出版社と信頼関係が出来ていたため、評論執筆の希望がすんなりと受け入れて貰えました。」今一線で活躍しているの

は、このような地道な努力の成果なのである。

ペンの力で有望株を世に出す喜び

では評論家としての醍醐味、そして後進に望むことは何だろうか。「評論という仕事は、自分の好きな演奏家だけ扱っていいのではなく、地味な面も多いのですが、毎日音楽会に行けるし、有望な人をペンの力で世に出せるという喜び、自分の感覚や言葉が日々磨かれて行く感じがあります。童心、向上心、そして人に対して愛情を持つことが大切だと思います。また、日本語を大事にすること、分かりやすい文章を書けるよう頭の中を常に整理しておくことが必要ですね。」そして、「真面目だけれどもユーモアのセンスを忘れないことも大切ですよ。」

今日はどのコンサート会場で、ステージを見つめていらっしゃるのだろうか。

## 音楽業界職業別インタビュー【2】

# 音楽知識・経験を生かしたサービス系



ホール運営・企画  
Hall Service & Management

### Interview

## 宮澤 政司氏

Masashi Miyazawa \* (株)東急文化村 オーチャードホールチーフマネージャー

### 職人から制作者へ

チェロを幼少から学び、東京芸術大学付属音楽高校から芸大へ、いわゆるエリートコースを歩んできた宮澤氏。卒業後は学生時代から所属していた東京フィルハーモニーで10年間、プロの演奏家として活躍した。その頃、「観客動員などは全てマネージャーの責任だ」と信じて疑わず、自分はひたすら職人に徹していたという。「中吊り広告を電車内に出すのに、広告一本新聞に掲載するのに、ホール入口で配られるチラシにどれだけお金がかかるか、チケット料金いくらで何人集客すれば黒字になるか、世の中がこうした資本主義の原理で成り立っていること自体、オケ奏者だった当時は気にも留めてなかったですね。」

そんな折、89年に渋谷にBunkamuraがオープンし、91年4月には何を思っただの転職。

「それから1年間は、それこそ電話、Faxに始まる事務の仕事一つ満足にこなすのに苦心する日々でした。」と宮澤氏は振り返る。入社3ヶ月間は舞台課で研修、それからオペラ制作のアシスタントに。92年から毎年モーストリー・モーツァルトなどを担当している。事務など地道な作業や様々なネゴシエーションを経験することで、常識と社会的キャリアが身についたそうである。

### 聴衆を意識すること

チェロ指導は転職後もしばらく続いていた宮澤氏だが、Bunkamura就職前後では、「指導の仕方が変わった」そうである。「第一に聴衆がどのような音を聴きたいのかを、意識させるようになりました。」

その宮澤氏の指導ポイントをご紹介します。「ピアノに限らず、なんでもテクニックの指導が先行してしまう傾向があるが、自分の弾いている音楽の色・におい・情景をいかに感じるか、楽譜から読取れるかが大切。要は「どの曲の何が好き」という譜面を見たときの自分の気持ちの置き方ですね。聴衆はきれいな音色より、少しくらいつぶれた音になっても、奏者の魂が音になって伝わった時に、聞いている人の心を打つのです。」

また聴く側も、アーティストの評価をコンクールや学歴などの肩書きとストーリーに頼りがちだが、「もっと生で聴いた直感に頼っていい」と主張する。

演奏する側、聞く側の理論の違いを知ってから、指導だけでなく、演奏の表現の幅も広がったことを実感されたという。

### ホール運営に必要な資質とは

「ホールは大きいでしょう。でも真新しい自分の家の絨毯や壁と同じように、トイレから三階席、ステージ、楽屋まで愛せる人が欲しいですね。」そしてホールとなれば毎夕、お客さんが顔を紅潮させて足を運んでくる。宮澤氏の「常にホールを満員にさせたいという熱意」がホール運営・企画を支えていることは間違いない。

また「この職種に限ったことではありませんが、社内外にどういう人脈を作れるか、また社会人として〇〇社の〇〇課にこういう人がいる、という信頼を得ることは不可欠ですよ」と大きく響きのある声で話す宮澤氏。氏によれば、「声が小さくて暗い人はだめ」だそうだ。

では、これまでに最も成功を実感したイベントは?

テレビ東京とのタイアップで毎年大晦日に行っている『東急ジルベスターコンサート』では、曲の終わりでちょうど午前0時を打つように、曲の開始時間を設定。ある指揮者のテープを聞き、いづれもほぼ15分14秒で演奏していることからヒントを得たという。年越しは演奏を終了させてからカウントダウンを行うイベントが多い中、この異色な演出が大いに受けているらしい。

宮澤氏はこうして毎日「何がお客さんを惹きつけるのか」を考え続けているのである。(9月14日/東急Bunkamura内にてインタビュー)



楽器店社員  
Piano Distributor

### Interview

## 笠置 和美さん

Kazumi Kasagi \* (株)ヤマハミュージック東京銀座店ピアノ係

### 卒業後は社会に出たい

「いらっしゃいませ」明るい声が響く。ここ銀座の真中という最高のロケーションで、約50台のピアノに囲まれてピアノを販売する笠置さんである。幼い頃からピアノと関ってきて、音大で学んだ笠置さんにとって、この就職先はまさに天職といえるかもしれない。

在学中、進路についてこう考えていた。「一般職希望でした。その第1の理由は、一度社会に出てみたい、音楽関連業

界に関わりたいということでした。音楽関連の企業を探していたところ、ヤマハに魅力を感じて入社試験を受けたのです。」

現在のピアノ係は、あらゆる質問に的確に答えられる商品知識と、店頭でのお客様とのコミュニケーション力が物を言う接客業務である。客層は、幼稚園、小・中・高・大学生から専門家まで、幅広い。いろいろな年齢と経験層の人がいるからこそ、「自分が経験してきたことを話して、お客様にご納得頂くことも多いですね。」

笠置さんは4才でピアノを始めて以来YAMAHAを愛用、その実体験と音の判断力で、着実にお客さんの信頼を得ている。銀座店に置いてある全てのピアノの特徴や性質を把握した上で、「お客様の将来性を見越して、的確な商品をお勧めするように心がけています。」そのお客様から1~2年後に、「とても音が自分に合っていて毎日頑張ってピアノを弾いています」という感想を頂くと、最高の喜びを感じるという。

かつて武田宏子先生の門下であった笠置さんは、「顔がとても広い」先生がレッスン時にお話下さるピアノ業界のことに、並々ならぬ関心を抱いていた。今店頭で多くのピアノ指導者と接する機会を持つ笠置さんは、そうした先生始めお客様との付き合いを、とても大切にしている。ピアノのように。

(10月15日/ヤマハ銀座店内にてインタビュー)



翻訳家  
Translator

### Interview

## 池田 由美子さん

Yumiko Ikeda \* バスティン教本翻訳・通訳 当協会正会員

東音企画から発売されているバスティン・メソッド教材・教本の、日本語訳手掛けている池田由美子先生。幼少から磨かれた英語のセンスに加え、留学時代に培った実社会で使える英語。その英語の達人池田先生にお話を伺った。

池田先生は、音楽に関する翻訳・通訳で、語学専門の人との違いについてこう語る。「語学専門の人よりは、音楽用語などのボキャブラリーが豊富で、経験から裏打ちされた的確な言い回しができます。これは普通の人にはない+αの能力ですね。」

池田先生の翻訳には「非常にわかりやすい」との評がある。その語学センスは、ミッション系幼稚園・小学校に通い、外国人シスター等に囲まれて毎日を送っていた頃に養われたらしい。「生活の一部として語学を学んだ」そうであるが、それに加え、音楽大学時代カリキュラムを精一杯こなしていたことも理由の一つだと思われる。

こうして音楽と語学は、池田先生の中に当然のものとして存在しており、自然に現在の翻訳・通訳といった仕事につながったと言えよう。

### 良い友達を作って、可能性を広げる

卒業後は渡米し、アメリカの大学でさらに研鑽を積むことになる。そして学位取得後、大学の室内楽奏者として仕事も決まっていた矢先に、個人的な理由で帰国することになる。「帰国後は何かから手をつけていいかわかりませんでし

た。そんな時、アメリカで親しくしていた人からピティナの仕事を紹介されたのです。」そして今はピティナの国際委員としても活躍する池田先生である。「フィールドの異なる人とも交流を持つことも大切です。知恵も得られますし、どこで可能性がつながるかわかりません。」

## プロフェッションにもビジネス的視点

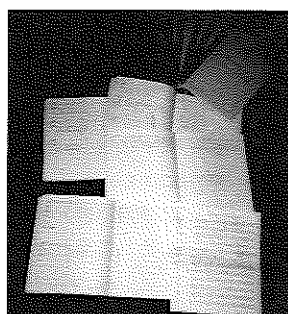
他の業種の知人・友人がいるピアノ指導者は、まだ少ないと言われている。が、池田先生曰く、「共通点がある」という医療業界の人とも交流があるそうだ。共通点とは、「仕事にはビジネスとプロフェッション(特に教養を要する専門

職)がありますPMFで故レナード・バーンスタインも『音楽はプロフェッション』とっており、私からみれば音楽や医学はそれに当たると考えています。」しかし音楽業界にありがちな崇高主義には疑問を持っている。「かといって、ビジネス的視点も欠かしてはなりません。「音楽は崇高なものだから、お金のことは言いたくない」という意見もありましたが、貨幣経済の世の中、プロであれば関らざるを得ない場合もあります。」と主張する。「人を愛しそしてプロとしての誇りを持って行動する。これから日本人が世界人として21世紀に飛躍するのに必要なことだと信じています。」

(取材◎倉持欣幸 9月19日/西宮市内にてインタビュー)



通訳・評論  
Interpreter



一柳先生の分析ノート

ました。そこで本来の目的は音楽の勉強であることを告げ、やっとモスクワ音楽院楽理科の先生を紹介してもらえたのです。」ロシア留学を決意してから3年目。ようやくモスクワ音楽院の聴講生となったのだ。しかし一学期で戻される。「全てロシア語で行われる講義やディスカッションに、ついていけなかった。そこでモスクワ大学で再度勉強し、1年後ようやく認めてもらえ、再度音楽院の聴講生になることができたのです。留学中の2年間は、寮部屋に『日本人学生お断り』の貼紙をしてまで、徹底的にロシア語に浸かる

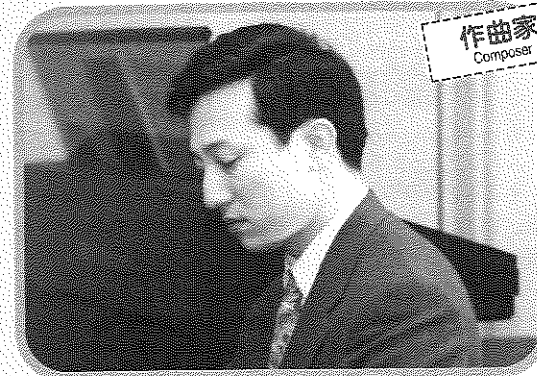
生活をしていました。おかげで高度なロシア語での会話や授業も難なくクリアできました。」そして大きな成長を遂げて、帰国の途についたのである。

## チャンスには果敢に挑戦

留学中からNHKロシア語講座の現地生レポート、レコード解説、オペラ対訳などの仕事の依頼を次々こなし、実績を積み重ねていた一柳先生。帰国後の86年は、折りしもベレストロイカの波、ブーニンの来日、翌年キーン来日と、ロシアがにわかに注目され始めた時期であった。「ロシア語通訳が不足がちだったこともあり、通訳の依頼が舞い込んできました。初の公開レッスン通訳は、88年プレトニョフ。その後、アシュケナージ、ロストロポーヴィチ、メルジャーノフ等、多くの著名音楽家のレッスンを通訳をしてきました」またピアノだけでなくパーカッション以外のレッスンは全て経験したというが、専門外の楽器の時は、「クラリネットの穴」まで抜かりなく専門用語の予習に時間を割く。

「音楽の通訳には、音楽が先にあり、そこに語学がついてくる感じ。決して反対ではないです。」自身、原子力会議等の畑違いの通訳をして、専門用語がわからず痛い思いをしたことがあるそうだ。こうしたプロ意識と音楽知識、情熱があるからこそ、アーティストから絶大な信頼を受けている。最近エレナ・リヒテルから、1960年以来絶版となっている、モスクワ音楽院附属中央音楽学校年間指導要領と試験課題曲一覧を譲り受け、現在その日本語訳を進めているそうである。その一柳先生の夢は、「ロシア語の使えるピアノ指導者を育てたい。」(9月13日/都内にてインタビュー)

# 音楽業界職業別インタビュー【3】 音楽の可能性を追求するクリエイター系



作曲家  
Composer

## Interview

### 小山 和彦氏

Kazuhiko Koyama \* 作曲家、国立音楽大学・同附属音楽高等学校講師

## 旺盛な研究意欲

今年度ピティナ・ピアノコンペティション特級新曲課題曲に選ばれた小山氏作曲『まどろみの中にて』。まだ記憶に新しい人も多いだろう。これを1週間で書き上げたという、その発想の源泉に触れてみた。

「ピアノを始めたのは12才の時で、ほぼ同時に作曲もしていました。」最初はピアニスト志望だったそうだが、スタートが遅かったこともあって断念。そこでかねてから行っていた作曲活動を志望するようになった。「自分の中で作曲というのは特別な位置づけではなく、語学ならば読みと書きのように、両方行うことは自然なことでした。」

中学から高校にかけて、ブラスバンド部でクラリネットを担当していたという小山氏。高校入学後はクラリネットのソナタや歌曲、ピアノのための奄美の子守歌による幻想曲、木管五重奏など、様々な楽器と形態の作曲に取り組んだ。一つの枠組みにはこだわらない小山氏の原点が伺える。ちなみに初めて曲として完全な形に仕上げたのは、バッハのインベンション研究をした後に創った作品だそう。『実はバッハは食わず嫌いでしたが、この研究が元で好きになりました。』

もちろんバッハだけでなく、「様々な形式を勉強するため、モーツァルトのピアノソナタを半分近く、バッハ平均律1巻全曲を暗譜、また指の訓練のためショパンのエチュードをゆっくり弾いたり、いろいろ試みをしてきましたね。大学時代は図書館が充実していたのでよく利用して、様々な音楽を知るために資料を読み漁ったり、また演奏会には中学以来沢山足を運んでますよ。」今でも研究や訓練には余念がない。こうして、学生時代約10曲、これまでに合計30~40

曲ほど作曲したという。

## 常に何かのために作曲

学生時代の作品は「同級生と共演するため」に書いたものが多い。だから「発想の源泉は特定できませんね。アイディアがふつふつと湧いてきて衝動的に作品を作る、というよりは、『このために作曲しよう』という目的と意識がまずあります。例えばコンペ特級新曲課題曲に選ばれた『まどろみの中へ』も、ピティナ・ピアノコンペティションの募集要項を見て取り組んだもののなのです。」

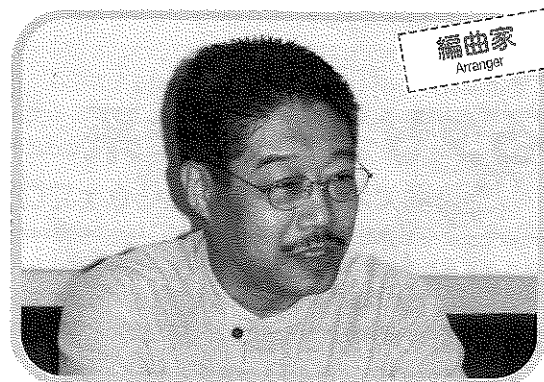
他にも多くのコンクールに参加し、いくつかは上位入賞を果たしている。室内楽曲、交響曲、連弾や日本歌曲なども手掛け、奏楽堂で演奏されたこともあった。「自分の創った作品が自然に世に出る機会はなかなか少ないので、コンクールは大変良いチャンスだと思います。ただその後つながっていかないのも事実で、マネジメント側の新人発掘意欲ももう少し欲しいところです。やはりお互いの歩み寄りが必要かもしれないですね。」

## 「衝動」の体験を

現在高校と大学で教鞭をとっている小山氏であるが、学生の音楽に対する姿勢が気になるという。「ピアノに対する取り組み方があまりにも受け身的であるように感じられます。管弦の学生は10代後半に自分の意思で始める人が多いですが、特にピアノは物心つく前から、好きか嫌いかわからぬうちに始めたという例が多く、自分の弾く楽器や作品に対する思い入れが少ないように見えます。」

作品はほとんど先生が選び、弾き方も先生の模倣。「ある時大学で学生にプレゼンテーションをさせたことがあるんです。しかし質問がほとんど出ませんでした。またプレゼンテーション内容の選択についても、強い動機づけがない」と手厳しい。この逆の例を外国で見た。「モスクワで自分の作品を演奏してもらう機会があったが、演奏時間よりもディスカッション時間の方が長い印象があったくらい、その作品に対する自分の思いの伝達、解釈の刷りあわせに時間をかけていました。」何が違うのだろうか。「音楽に能動的に関わるには、やはり『衝動』の体験が必要でしょう。」ちなみに小山氏が衝動を覚えたのは、マーラーの交響曲第9番第1楽章。またベートーヴェン・ソナタ最後の曲にも高い精神性が感じられ、衝動を受けたという。

とにかくバロックから現代曲に至るまで素晴らしい曲が沢山あり、それらに「少しでも近づきたい」というのが、作曲の原動力になっているようである。(10月4日/都内にてインタビュー)



編曲家  
Arranger

Interview

## 上柴 はじめ氏

Hajime Ueshiba \*作曲家・編曲家

### 「音楽は学問じゃない。芸事です。」

今年11月にDENONから発売となるCD「日本の叙情歌シリーズ」のアレンジを手掛けた上柴氏。これは氏の信条である。

普通高校在学時にピアノを始めた上柴氏は、卒業後音大の作曲科という進路を選択した。転機は高校時代の先生との出会いだったそうだ。「その先生は、音楽の作りを教えてくださいました。例えばツェルニー30番のこの曲はこのように構成されている、等と。そこで音楽の楽しさに目覚めたのです。」その先生と出会わなければ、音楽の道に進むことは

考えなかったそうである。「良い指導者との出会いは大切です。」

そして大学入学後は、「先駆的で、技巧的な作曲をしたい、しなければ」と意気込む学生が多い中、「もっと聴いていて気持ちよい曲を作った方がいいんじゃないか。」と思い続け、逆にコンプレックスを抱いたこともあるそうだ。が、今でもその信念は変わらない。

卒業後の上柴氏の道を方向づけたのは、プロとしてナイトクラブでのステージに立ったことだ。実は当初教員を目指しており、大阪、京都で合格していたが、ポストがなくYAMAHAに就職した。しかし「音楽は現場が大切」と2年で退職し、前述の関西のナイトクラブのジャズバンドに、エキストラで入ったそうである。

もともとクラシックだけでなく、ポップ、ジャズもよく聴いていたという上柴氏は、「その幅の広さ、音楽の許容範囲の広さが後々役に立ちました」と語る。

そこで踏んだ生ステージの感触は、お客さんに対する姿勢をも決定付けた。「プロはサービス業だから、お客さんが楽しめるステージを提供しなければいけませんね。しかし、あくまでも基本には忠実に。」

### プロと一般の人の橋渡し

才能ある人が世に出てきている今、「もっとプロの演奏家が一般の人に歩み寄って音楽を聞かせる必要があるのでは」と上柴氏は感じている。「わかりやすい音楽を。」今回の日本の叙情歌アレンジは、まさにびったりの企画であった。「昔の曲には、和声的に不完全な部分などもあります。しか

し音楽的に正しく心地よいハーモニーに置き換えることで、生まれ変わる。『懐かしいけど、何か新しい』そんな印象を喚起できると思います。」

もちろん、「あくまでも元のメロディが王様で、それを盛り上げるのがアレンジャー」であることには変わらない。それをわきまえた上で、自由自在に音楽をアレンジする。そのためには、しっかりとした和声の知識と技術は欠かせない。「これがあれば音楽も自由自在です。」

今回上柴さんのアレンジ曲を演奏した関春絵さん（99年度ピティナ・ピアノコンペティション特級金賞受賞）は、「クラシックの曲に比べて、1曲3分前後と非常に短いものですが、その中に色々な要素が詰まっているという印象でした。あ、こんなアレンジの仕方もあるのか、と、日本の歌が身近に感じられるようになりました。」と感想を述べた。

### どんどん他流試合を

「自分の音楽の幅を広げるためには、どんどん他の人と



CM作曲家  
Composer

Interview

## 南方 美智子さん

Michiko Minamikata \*ラジオ曲・CFソング作曲

二宮裕子先生（ピティナ理事）、江崎光世先生（ピティナ評議員）の門下で、腕を磨いてきた南方さん。ピティナ・ピアノコンペティションでも1988年F級銀賞、1993年G級銅賞と素晴らしい成績を残している。

実は現在、面白い活動を繰り広げている。「ねこマジ（ツインヴォーカルとピアノ）で、ライブ活動と音楽制作活動とを行っています。制作においてはラジオCM（『講談社TOKYO1週間/KANSAIヨタ東京カラオケ』他）とテレビCFへの出演（『マツモトキヨシ』他）、楽曲提供をしています。」と多彩である。

何故この道を選んだのだろうか。「進路については毎日のように考えていました。今も考え続けています。クラシックだけの演奏家には、音大受験時からなるつもりはありませんでした。しかも、音楽そのものだけでなく、その周りにあるもの、社会とか人間とかに絡んでいく感じのこと

セッションをするというですよ。それが結果的にソロの上達にもつながります。」と上柴さん。関さんは学生時代は弦、管楽、歌とのアンサンブル、2台ピアノ等、いろいろ試みたという。上柴さんは、こうした体験が「人の音楽性や解釈を知る糸口になり、また自分の長所、短所も見える」と勧める。

また仕事も同じで、「こうした他人との関係を大切にっつけていけば、チャンスが広がります。関さんだって、今回の叙情歌の仕事を「クラシックとは違うからやりたくない」と断ってしまえば、その次にはつながらない。つまりどんな仕事でもチャンスと思っておるそかにしないことが大切なんですね。」

最後に一言。「譜面以外弾いてはいけない、なんて意識をたまには振り払ってもいいのでは。遊び心も必要ですよ。時にはダジャレもね。（笑）」（9月8日／都内にてインタビュー）

がやりたかった。」という。幅広い活動を実現させているのは、その食欲な好奇心や社会への感心が理由だと伺える。

それでは、こうした仕事はどのようにして得たのだろうか。「ラジオCMの最初の仕事は、ねこマジのメンバーからの紹介です。このメンバーは二人とも役者で、この人達の人間関係に混じること、今の仕事と人脈の多くを獲得しました。」違うフィールドの知り合いがいると、その幅は限りなく広がっていくようである。

現在、こうした多彩なアレンジを手掛けておられるが、純粋なクラシックピアノからは、何を学んだのだろうか。「アコースティックピアノのテクニックを身につけることを通して、表現の幅が広がりました。音色を変化させたり、多声部にアレンジして弾いたりするという、クラシックピアノを経験したからできるピアノの操作方法が、私の特徴の一つになっていると思います。」こうした基礎力をもとに、今は自在に世界を広げている。

南方さんは、こうした仕事には「自信を持って世の中にアピールできる作品を作って、さらにその生みだした作品をお金に換えること。」というビジネスセンスも必要という。

最後に、どのような後進を育てたいか、とお尋ねした。予想とは逆に、「若い人に刺激を受けたいし、そのような人と共にいろいろなことを一緒にやっていきたい。その中で、後進達に育てられていきたい。」とのこと。ますます今後の活動が注目される。

「ねこマジ」Live vol.11  
日時：2000.11.6（月）11:7（火）19:30-  
場所：南青山MANDALA 03（5474）0411  
問合せ：ネルケプランニング  
03（5469）2768  
URL：http://hello.to/gyu  
\*自主制作CDシングル「びっくりんは今日も行く」発売中！



## 岡野 博行氏

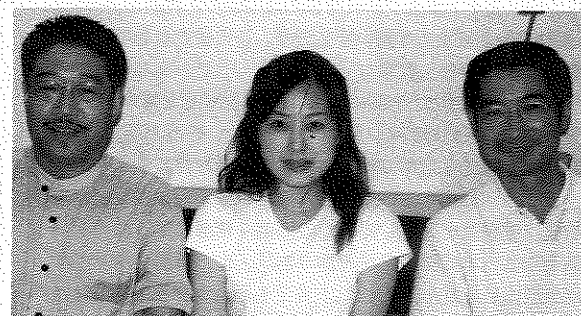
DENONクラシック  
制作オフィス・ディレクター

今回のCD「日本の叙情歌シリーズ」は、せっかく素晴らしい日本のメロディーがあるのに、再生産されていないのはもったいない、という思いから企画しました。アレンジを加えてピアノソロに仕立て上げることで、日本の叙情歌に新しい伝統が作れるのではないかと思います。日本的な情感をどう出すかが鍵ですね。日本人が日本の歌を手掛ける意味は、そこにあると思います。アーティストと一般視聴者の中間に位置している制作会社としては、少しでも多くの人に好んで頂ければ嬉しいですね。若い世代の人にも是非聞いて頂きたい。」

### CD「ピアノで奏でる日本の抒情歌」ご紹介

- 2000年12月1日発売予定 全5枚
- ピアノ：高木早苗、関春絵、伊賀あゆみ
- 編曲：上柴はじめ、石川芳、宮野幸子
- 価格：税別 各2000円
- 録音：2000年9月 南大沢文化センター

右写真）上柴さん（左）、今回上柴さんのアレンジ曲を演奏した関春絵さん（中央）とCD企画者の岡野さん（右）



# 本職との両立を目指して【1】 俳優活動と音楽表現の相乗効果

特集1



Interview

## 大沢 勇さん

Haruo Uesugi\*  
青山学院大学在学中。20歳。ピアノを金子勝子師に師事。「コシノジュンコ東京コレクション」など、モデルをする傍ら、CMでは、「SONY」「CocaCola」「Macdonald」「Compac」「ベネッセ」に出演。役者としては、「八神君の家庭の事情」（定岡 数馬 役）、「SPINCICLE（ハリウッド映画）」（REIKO役）、「告別」（若井太役）他出演するなど、多岐にわたって活躍中。

得もいわれぬ美しい世界を描き出す映画。その中に自分が入れたら・・・と、誰もが一度は思ったことだろう。ここでご紹介するのは、名匠大林宣彦監督にあこがれ続けて10年、ついにその夢を実現させて役者としてスタートを切った、大沢勇さんである。今秋公開予定作品『告別』にて、リスト「ため息」を弾く青年役で、大沢さんは準主役をはった。偶然にも、これがきっかけで一時中断していたピアノへの思いをよみがえらせたそうである。そして今は、当協会監事・金子勝子先生のお弟子である。現在は「いてもたってもいられないくらいピアノが好きで、レッスンに通うのが何よりの楽しみ」だそうだ。現役大学生として会計の勉強、俳優として演技の稽古と体力作り、そしてピアノの練習、1日を密に生きている大沢さんに、そのピアノへの思い入れと素顔に密着してみた。なお今回は、大沢さんの演技指導及びプロデュースをされている、安井ひろみさんにもお話を伺っている。

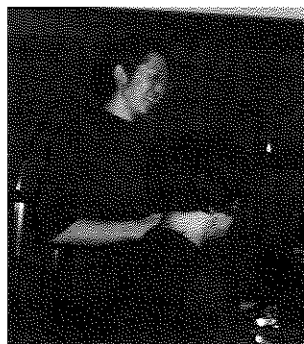
金子勝子先生×大沢勇さん

「最近では、朝6時に起床してハノンを3時間練習することもあります。」早朝にハノン3時間の練習はさぞや厳しいのでは、と思いきや、「この練習が楽しくて仕方ないんですよ。金子先生の教えて下さるハノンは、単なる訓練でなく、音楽的なんです。それに徐々に指が出来上がっていく満足感も得られます。」

今回、金子先生と大沢さんのレッスン風景を見学させて頂いた。ハノンの緩急つけたスケールから始まり、チェルニー30番、虹のプロムナードの曲、と続いていく。時折、離れたソファに座って聞いている金子先生から、声高のアドバイスが飛ぶ。大沢さんはその都度、「はい、こうすれば良いですね」や「自分はこう思うんです」と、切り返す。テンポの良い会話の中で、レッスンが進んでいくという感じだ。「先生は音楽的に弾けてないと“引く”んです。だからそれに気付いて、懸命に食らい付いていかないと大変です。」謙虚な姿勢の大沢さんは、こう語る。

一方、「師匠」である金子先生曰く、「今はあえてグレードを落として確実な基礎練習をさせている」そうである。素晴らしい演奏・演技の土台にあるものは、基礎練習で培った揺るぎない自信である。そして曲を仕上げるプロセスでは、「さすが役者だなと思わせる表現力が垣間見えます」とも。方法が異なるとはいえ、ピアノ演奏と演技における自己表現の心理的プロセスは同じなのだ。

レッスン中、「これはどんな情景を描こうとしているの」という質問に、間髪入れず答えた大沢さん。常に想像力を働かせながら芝居をする役者の顔が、覗いた一瞬であった。



「ピアノのレッスンに励む大沢君。金子先生と息のあったトークを交わしながら、レッスンは進む。」

安井ひろみさん×大沢勇さん

大沢さんは、安井さんの演技指導に心底信頼を抱いている。そして安井さんも、大沢さんの資質と将来性に、限りない期待をかけている。そこに垣間見えるのは、究極のパートナーシップである。

安井さんは現在、自ら主宰する安井塾にて、プロ中心とする役者育成、映画のプロデュースをする傍ら（高橋克彦原作 ホラー作品「私の骨」来年2月夕張映画祭に出品予定）、年始より放送予定のNHK大河ドラマ「北条時宗」の演技トレーナーとして活躍するなど、忙しい毎日を送っている。

18年間文学座の女優として活躍後、安井メソッドと言われる独特の演技指導法を確立して現在は第一線の俳優の指導に当たっている。

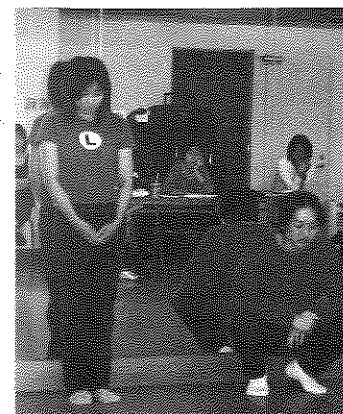
この度大沢さん始め、塾所属の役者さんの稽古場を見学させて頂いた。渡されたこの度大沢さん始め、塾所属の役者さんの稽古場を見学させて頂いた。渡された台本は4ページ。塾生の為に書かれた台本だ。それを入れ替わり立ち代わり、役者が役を交代して演じている。

「それぞれの俳優の課題に沿った指示を出します。何回も繰り返し演じるうちに、本当の自分が見えてくる。借り物ではない自分の演技がつかめてくるのです。」

演技中でも柔軟なく、安井さんの注意が飛んでくる。

「自分の日常の感情を観察すること。泣く演技が必要な時は逆に泣くまいと努力すること。そうした反対の感情表現を加えた方が、演技に厚みが出るから」そう、安井さんの追求しているのは、この「リアリティ」である。

大沢さんの演技は、自然で演技に見えない。そうしたリアリティに近づけるのは、「感情のひだを沢山持っているから。」と安井さん。「ピアノも同じだと思いますが、台本や楽譜など平面上に書かれているものを正確に再現するだけであ



写真のような立ち稽古の他せりふの言い回しやイントネーションの付け方の練習など、様々である。

仲良しの和泉元爾さんと演技の打合せ中。自分の指導で、役者の内なるものが表出し、変化を遂げていくのが楽しみ。大人には大人の、子役には子役なりのリアリティを追求したい、と語る。



ば、コンピュータでもいいのではありませんか。けれど、表現者を通して再現されるのであれば、その意思や思いがその人を通して出てくるはず。だから感情のひだを多く持つこと。そして、その心情をより的確に伝へるには確実な論理に裏打ちされた技術が必要なのです。」

ところで安井さんは、感情表現の指導をする時、本人の得意分野の用語で説明する。大沢さんの場合は、例えば「台詞は短調から入ってはならない。感情の持続にはスラーとかタイで引っ張るという表現が使われる。」「愛しているものを大切にすること、自己表現手段は沢山ある方が、感情のひだが多くなり、演技の幅が広がる。だから大沢君には愛するピアノは生涯続けてほしいし、また会計士の勉強もおろそかしてはいけなと指導しています。ちょっと厳しいかな（笑）」と言うが、大沢さん自身も一度決心したら決して手放す性格ではないようだ。



特集1

## 本職との両立を目指して【2】 ピアニストと医療の道をともに追求



ピアニスト・医師  
Pianist & Doctor

### Mail Interview

#### 上杉 春雄氏

Haruo Uesugi\*  
中学校3年生の夏、ピティナ・ピアノコンペティションG級にて金賞を受賞された上杉 春雄さん。自分の進路についていろいろ考えた末、人が生きるといふことにより本質的な、かつ基本的なかわりを持つ仕事につきたいという思いから、医者という職業を選択されたという。しかし音楽の道も同時に追求し続け、医療現場に携わる傍ら、演奏活動もこなすという精力的かつ多忙な上杉さんは、現在はスウェーデンに医師留学をされている。

恩師である宮澤功行先生（当協会評議員・札幌コンセルヴァトワール院長）と三者間メールインタビューを行った。

Q.お仕事と演奏活動との両立が大変だと思いますが、現在は日常生活でどのようにバランスを取られていますか。

仕事はきちんとしなくてはならないから、時間があれば練習し、無ければしないというスタンスです。スケジュールが許せば人前でも演奏するし、忙しければ待機にしています。ただし、「ピアノを弾く」ということはなるべく突き詰めて考え、少ない時間でも最大限の効果が得られるよう工夫はしています。

最低限のピアノの構造を勉強したり、また専門分野である腕の構造、神経系における運動コントロールシステムなどに関する知見から導き出して、自らの奏法や練習に役立てています。またピアノに向かえない時間を使って、楽曲分析などを自分なりに行ったりしています。

今は練習時間はきわめて少ないですが、可能ならもっと増やしたいとは思っていますよ。

Q.学生というならば、勉強と音楽の両立が悩みどころかと思いますが、勉強だけでは得られない音楽のメリットは何だとお考えですか。ご自身の体験を振り返ってみてお答え下さい。

勉強だけでは得られない、ということは沢山あると思います。ピアノを通じて多くの人と良いコミュニケーションがとれたこと、人前で何かをするというチャンスを幼少時から得られる等々。今学会の発表の時に全く緊張しないのは、舞台慣れしていることもあると思います。

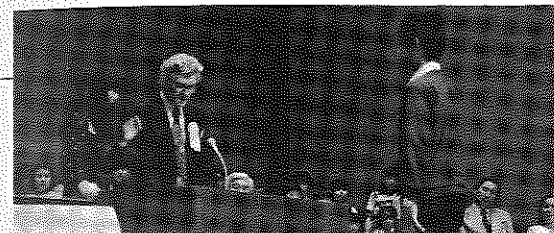
ただし、このあたりはピアノとどの程度のかかわり方をしたか、ということと直接関係してきますね。勉強一筋の人生も、またその人にとっては意味があると思います。何をやってもやり方次第で、得がたい経験を得られるのではないのでしょうか。私の場合、仕事とピアノ、全く別のものとして追求できることは幸せだと思っていますが、たまたまこうなっただけなのです。

### 音楽そして人生を考える視野への指導

Q.人間関係が広がるということですが、ピアノを通じて様々な出会いがあったと思います。それでは上杉さんにとって、恩師宮澤先生はどのような存在でしょうか。

ピアノの先生というイメージとは最初から違いました。もっと大きな存在で、強い言葉をつけるなら人生の師匠みたいなものではないでしょうか。とにかく8歳の時に初めてレッスンに伺って以来先生に会えるのが嬉しくて仕方がなかったのをよく覚えております。もちろん厳しいときは厳しかったのですが、きっとそこには人と人との良好なふれあいが存在していたのでしょう。

その後も単にピアノを弾く、という狭い視野ではなく、



左)1981年ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会表彰式にて、アンドレ・ヤシンスキー先生からシヨパンメダルが授与される  
右)サントリーホールでのデビュー演奏会のあと。宮澤先生ご夫妻とともに。

音楽を考える、さらにはそれこそ人生を考える、といった大きな視野でいろいろな指導をしていただいたと思っています。

Q.では、宮澤先生にとって上杉さんはどのような存在でしょうか。

私は、一つの仕事に打ち込むことで見えるであろう森羅万象の世界に憧れてピアノ一筋の人生を歩んでいましたが、上杉春雄君と出会い、彼のように多彩に優れた人もいるものだと思わされました。

彼とのレッスンを重ねるにつれ、私は長い間、欧米でよく出会うこうした真の芸術家達を、日本人もそろそろ受け入れる度量を持って欲しいと願うに至りました。

私が勝手に惚れ込んで彼の色々な演奏会やレコード製作などをして行ったことが、やがて東京のサントリー大ホールでのピアニストデビュー、東芝EMIから3枚のCDを発表へとつながって行きました。この出来事は私の夢が一つ叶ったことでもあり、生涯忘れることの出来ない物語として語り継いでいきたいと思っています。

### 楽曲分析・哲学・運動生理学などを修得した上で、自らの演奏を確立

Q.なるほど。このお二人は出会うべくして出会ったといえそうですね。お互いの持つ波長、才能といったものが、響きあったのでしょうか。宮澤先生はピティナ・ピアノ指導セミナーでも、その豊かな知識をご披露頂きましたが、上杉さんも同様に知的好奇心と物事に対する造詣が深いようです。興味を持った作品や作曲者について、どのように勉強されているかをお教え下さい。

幸い宮澤先生が自由な考えの持ち主でいらっしゃったので、幼少期から沢山の方の指導を並行して受けさせていただく機会を、先生自ら作ってくださいました。その過程で藤井一興氏には奏法の基礎を叩き込んで頂きましたし、北川正氏にはフランス音楽を学ばしつけを与えて下さいました。

未知の領域だったドビュッシーの勉強を開始するにあたり、彼のさまざまな音楽を一室内楽からオペラ、歌曲も含めて一通り耳で聞くことのほかに、楽曲に対する分



析を自分流に試みることにしました。独学に近いところからはじめましたので、まず手に入る限りの書籍を洋書も含め本屋、大学図書館等で集め、また自筆譜ファクシミリなど、必要と思われるものは全て取り寄せました。徐々に自分なりの視点でどのように曲を分解していったら良いか、作曲者が何を考えてこの音を配置したか、それはどのように弾かれるべきか、ということが見えてくるようになり、最終的には自分の方法が間違っていないかどうか、作曲家の方のところに通って学んだりもしました。

次に分析できたことを音に変換するわけですが、その間にイメージの世界が必要だと思います。ドビュッシーには水にちなんだ曲が多いですが、水、というものの持つイメージを彼がどう捉えていたか、それをどのような形で音の世界に移していったか、ということと考えるためにジャンケレヴィッチやバシュラルなどの哲学者の考えも参考にいたしました。

最後にそのイメージを具体的に表現するための技術、すなわち奏法が必要になりますが、この過程で筋肉や運動生理に関する自らの知識を動員し、ピアノという機械から望む音を探す努力をいたしました。

このようなことをしっかりと勉強した上で、自分なりの演奏を確立するというのが、僕の共感できる態度です。勉強の仕方、演奏の方法には、人それぞれのスタイルがあると思いますが、私は自分の信じるようにやっているだけです。

Q.それでは宮澤先生から最後に一言お願いします。

近年、生涯学習が叫ばれていますが医者とピアニストを両立させている彼の行き方は、その大きなモデルケースになるように思えます。彼の今後の活動が、音楽家以上に音楽への思いが強い方達に夢と希望を与え続けていくと欲しいと願っています。

## 本職との両立を目指して【3】

# J.S.バスティン先生の愛弟子は今



医学生

### Tien-Yu-Changさん

1. あなたが音楽以外の専門の学問又は職業の道を選択した理由は何ですか？
  2. 音楽の道を歩んでいない現在でも音楽とは関わっていますか？
  3. 今までのピアノ教育が現在の仕事に与えている影響は何ですか？
1. 私は専門家になるために音楽を選んだ訳ではなく、医学の道に自分の使命を見出しました。病気そのものではなく患者一人に真摯に対応する態度こそが、医療に欠けている重要な要素だということに気がつきました。
2. できるだけコンサートに足を運ぶつもりです。例えばそれがバリのオペラ座やロサンゼルス・ドローシー・チャンドラーパビリオンあるいは、ニューヨークのカーネギーホールであっても行くつもりです。
- 医学部2年生なので定期的にピアノを練習することは極めて困難です。でも、今年のタレントショーに出演予定なので、最低週1回は練習するつもりです。
3. 大勢の聴衆の前でコンチェルト演奏出来たことで、同期や教授の前で患者の診察を忍耐強く行う自信と平静さを与えてくれました。また集中力を持続し、プレッシャーの中で仕事を進め、仕事への情熱をかき立てる力を引き出してくれました。また、チームワークは全体の調和を作り出す上で不可欠だと言うことが分かりました。医療現場でも同じで、スタッフ一丸となって協調して仕事を進めなければなりません。
- それから目的指向が強くなりました。数々のピアノコンクールで入賞して経験を通じて分かったことは、成功とは勤勉、忍耐、意志力、そして幸運の結果だということです。ピアノは人生の様々な面に目を開かせてくれました。

コンピュータ技師

### Linda Dunnさん

1. 私は数学が得意でしたので、現実的な理由でコンピュータ・ソフトウェア開発の道を選びました。
  2. 現在は趣味としてピアノを弾いています。ここ数年、毎年私のコンドミニアムでホリデー・パーティーを催していますが、そこでクリスマス・キャロルを2時間も弾くんです。皆演奏を楽しんでくれますし、また食後には全員で合唱もする楽しい一時です。
- 家で練習する時は大抵落ち込んでいる時ですね。ピアノを弾くことによって、自分には上手なものがある

のだという満足感に浸っています。またかつて州のコンクール等で優勝した経験は、「好きなことで一番になった」という自信と誇りを与えてくれました。

3. 練習することで完璧になれるということです。ピアノの演奏には「適当」ということはありません。音符を音楽的に弾くか、音符を間違えるか、その中間がないのです。これまで受けてきたピアノ教育は、仕事や人生のあらゆる局面において、私を支えてくれています。記憶力や集中力が磨かれたこと、また仕事では完全主義であることも自覚していますが、これもピアノ教育の過程で培われたものと思います。またコンピュータを自在に操る「flying finger」にも、同僚は目を丸くしていますよ。

コンサルタント

### Taka Arigaさん

1. 私は大学進学の際、専攻科目の選択についていろいろ考えました。音楽の世界に強く惹かれていましたが、一方でその世界で成功することがいかに難しいかを自覚するようになりました。技術的な訓練を始めたのが遅かったのですね。悩んだ末、一見矛盾するような分野である、コンピュータ技術に進む決心をしました。
- しかし、音楽も同時に続けることを希望し、優れた音楽環境があるジョン・ホプキンス大学を選びました。この大学の姉妹校にピーボディ音楽院があり、この二つはまさに私の求める理想の環境を提供してくれました。卒業後私は、コンサルティング会社に就職しました。
2. 大学在学時は、週4-6時間何とかピアノ時間を確保していました。その苦労は大学4年次、芸術性に優れた者に贈られる2000年度ルイス・サドラー賞の受賞者に選ばれたことで結実しました。受賞そのものはまぐれだったかもしれませんが、「自分には芸術性がある」と自覚できたことが大きな喜びでした。在学時から、ピアノ以外にチェロも弾き素晴らしい先生にも巡り会いましたが、最近ますます指揮にも惹かれています。残念ながらピアノは卒業以来触る時間がありません。
3. ピアノや音楽は、人生というドラマにおいて憩いの場ですね。5線譜上の音符は数学の記号に見えてかなり生気に乏しい感じがしますが、その音符がひとつひとつ音楽として表現されると、全く違った時空間が立ち上がってくるのです。私はこの原理を日常の仕事に置き換えて、物事を違った角度で見て、問題を解決するように努めています。そして何より周りの状況や人のことを考え、気遣うようになりました。これは尊敬するジェーン・バスティン夫人等によるピアノ教育に拠るところが大きいと思います。

# ピティナ ピアノ指導 セミナー vol. 11



## 第1講座

### ポーランドの舞曲

～ショパンを中心に～

午前10時30分～午前12時

講師：ハリナ・チェルニー・ステファンスカ 通訳：吉川 元子  
(東京藝術大学音楽学部ピアノ科客員教授)

## 第2講座

### モーツァルトとクレメンティの競演

～ピアノ創作・演奏様式における二つの道～

午後1時～午後2時30分

講師：海老澤 敏 (音楽学者、音楽評論家、当協会理事)  
ピアノ：小川 京子 (ピアニスト)

## 第3講座

### 20世紀のピアノ音楽

～モダンを超えて甦るピアノのために～

午後3時～午後4時30分

講師：三善 晃 (作曲家、日本芸術院会員、東京文化会館館長、東京芸大講師)

2001年1月14日(日)

ハーモニーホール (中野坂上ハーモニースクエア内)

営団地下鉄丸の内線・都営地下鉄12号線中野坂上駅下車徒歩1分

#### ●参加料

全講座通し券・一般 10,000円 指導者割引 9,000円 会員割引 8,000円 (限定200席)

※ピティナ会員の方は会員券をご予約下さい。指導者割引は参加者の指導者が会員、またはピティナ演奏検定参加経験者の場合適用されます。今回は1回券の設定はありません。

#### ●申込期日

2001年1月8日(月)

申込期日を過ぎても定員に余裕がある場合は当日まで受付致します。

1月8日以降お電話でご確認下さい。

このセミナーはピアノ指導者・学習者から一般のピアノ音楽愛好家の方々まで幅広くご参加頂けます。なおこのセミナー全講座ご出席の後、期日までにセミナーレポートを提出して頂いた方(希望者のみ)はピティナ指導者検定上級第2課程にエントリーができます。くわしくは当日会場にてご説明致します。

なお、ピティナ・ピアノ指導者検定はどの課程からでも参加できますので、以前の課程を全く取得していなくても大丈夫です。

#### ●参加申込方法

申込締切日までに電話・ファクス・メール等で下記までご連絡頂くか、もしくは所定の参加申込書に必要事項をご記入の上、受講料振替払込票(ご送金は郵便局備え付けの用紙でできます)を所定の位置に貼付して東京本部までご郵送下さい。(インターネットでもお申込ができます) 入金が確認され次第チケットをお送り致します。なお一旦お申し込みの後は原則としてキャンセルできませんのでご注意ください。

郵便振替 00120-4-44927 ピティナ生涯学習振興部

#### ●申込・お問い合わせ先

社団法人 全日本ピアノ指導者協会 担当：正木 masaki@piano.or.jp  
〒170-8458 東京都豊島区巣鴨 1-15-1 TEL.03(3944)1583  
FAX.03(3944)8838  
社団法人 全日本ピアノ指導者協会  
http://www.piano.or.jp

協力：株式会社 ムジカノヴァ

社団法人 全日本ピアノ指導者協会 http://www.piano.or.jp  
〒170-8458 東京都豊島区巣鴨1-15-1 TEL.03(3944)1583 FAX.03(3944)8838